

ENG アトラス

めまい・平衡機能障害診断のために

小松崎篤(著)

東邦大名誉教授

山本昌彦

ENG の重要性を再認識させる 著者渾身の一冊

この度、医学書院から『ENG アトラス』が出版された。著者は小松崎篤先生(医科歯科大名誉教授)である。

小松崎先生は、わが国のめまい・平衡障害疾患を牽引してきた先生で、この世界では知らない人はいない。先生は、私の師匠であり恩師である。既に大学を退職されてから20年近くになった今、なぜENG(electronystagmography)なのだろう。また、このような400ページを優に超える著書のなかに芸術的ともいえる700余枚のENG記録を収録して出版されるエネルギーに、弟子の私は唖然となり、内容を見て二度三度と感激している。

先生はENG機器が真空管で作られた時代からトランジスター・半導体になって安定性が得られるようになった現在までENGのJIS規格(JEITA規格)や機器の改善に尽力されており、現在でも必要に応じて自ら外来でENG記録を行っている。そのためENGの性質については全てを熟知し、その知識を網羅した著書とすることができ、ENG記録の基本から高度な診断力を有する異常眼運動までがこの一冊に凝集されている。

現在は、赤外線ビデオカメラによる眼振や異常眼運動の観察が多く行われるようになってきたが、VTR記録をしていなければ戻って再観察することはできない。記録した動画を何度も反復させるのも面倒な操作である。また、同じ動画の眼運動を何度も繰り返して観察しなければ、どのような異常を示しているのかわかりにくい場合も多々ある。ENGは、記録紙を広げることで、じっくり判断が可能である。赤外線ビデオカメラとENGについては、それぞれの利点・欠点はあ

るが、それぞれの欠点を補うためには双方での検査記録が重要である。従来のENGの欠点として回旋性眼振の記録ができないことが挙げられる。

一方、赤外線ビデオカメラ、あるいはそれを利用した回旋性眼振の記録器も臨床に応用されているが、閉眼時の眼球運動の記録ができないことが欠点で、特に末梢前庭系疾患では暗所開眼より閉眼で暗算負荷のほうが眼振の出現率が大きいことは本書でも示されている。

ENG検査は、現在、臨床検査技師の行う生理機能検査部門として行われるようになってきた。医師が週に1~2件の検査を行うくらいではなかなかきれいで正確なENG記録はできない。長くENG検査を行ってきた臨床検査技師は、安定した記録ができ、さらに経験を積むに従ってきれいな記録ができるようになっていく。耳鼻咽喉科がめまい疾患の紹介を受ける機会が多くなっている現在、病院などの医療機関には十分なENG検査ができる設備が必要である。小脳の変性疾患の早期発見は、ENGなしには進まない。

重大な疾患を見逃すわけにはいかならないと言われるこの時期に、ENGに関わる専門書が出版されたことは、今後の診療形態に改めてENGの重要性を再認識させてくれる。耳鼻咽喉科医はもとより、神経内科医、脳神経外科医、眼科医には必携の書である。また、ENGの記録の見本となるアトラスがふんだんにあり、臨床検査技師にもわかりやすい。さらには、めまい・平衡障害の疾患についての説明が網羅されており、医師のみでなく臨床検査技師、看護師などにも推薦したい書である。

● A4/頁448/2017年

定価：本体8,200円＋税[ISBN978-4-260-02131-9]

医学書院 刊